

渡航自由化以降に出版された海外旅行ガイドブック に関する基礎的研究

A Basic Study on Japanese Overseas Travel Guidebooks after 1964

岩田 晋典*
Shinsuke IWATA

Abstract: Although surprisingly very limited number of tourism studies have so far been made at analysis of travel guidebooks, earlier studies have showed two tendencies: One is textual approach, which focuses on its discourse and representation. The other is individualist approach, which deals with either guidebooks for a specific geographic area or a specific guidebook series. To the contrary, this paper, treating travel guidebooks as a media, analyzes the comprehensive range of overseas travel guidebooks, 6906 volumes of 212 series, which have been published in Japan from 1964 to 2008. Some of the results from the analysis are: similarity between the numbers of travel guidebooks and the ones of Japanese overseas travelers, the bias for nation-state in destination, and diversification of destination.

Key words: 旅行ガイドブック (travel guidebooks), 海外旅行 (overseas travel), メディア (media), デスティネーション (destination), 海外渡航自由化 (Liberalization of Overseas Voyage)

I 序論

- 1) 問題の背景
- 2) 目的と意義、本稿の構成

II 研究対象と調査法

- 1) 本稿における“旅行ガイドブック”
- 2) NDL-OPAC を用いた調査
- 3) 対象の限定
- 4) 地域名の抽出

III 旅行ガイドブックとデスティネーションの考察

- 1) 旅行ガイドブックの概要
- 2) デスティネーションの構成要素
- 3) 大陸別・国家別に見た推移

IV 結論

I 序論

1) 問題の背景

旅行ガイドブックを観光研究という分野の中で捉えてみると、逆説的という言葉が想起される。どの旅行者も何らかの形で旅行ガイドブックというメディアを利用する（あるいは利用してきた）ことから、旅行という実践について考える上で旅行ガイドブックが無視できない材料であることは否定できない。そうであるにもかかわらず、観光研究において、旅行ガイドブックが十分に研究対象として位置付けられてきたとは言いがたい。

たとえば手元にある観光研究の辞典や用語集を取ると、「ガイドブック」そのものを事項にして

*立教大学観光学部・助教

いるものは限られていることが分かる。『現代観光学キーワード事典』（前田，1998）には「旅行案内書」という項目があるが、『観光学辞典』（長谷，1997）や『観光・旅行用語辞典』（北川，2008）では、有名なガイドブック・シリーズの創始者や「旅行用心集」などの個別事例しか紹介されていない。ここには、観光研究における旅行ガイドブックの位置づけが端的に現れていると言える。

しかしながら、もちろん旅行ガイドブックがまったく無視されてきたというわけではなく、旅行ガイドブックを取り上げる研究が徐々に蓄積されつつあることもたしかである。とくに、旅行ガイドブックの記載内容に注目する研究は決して珍しいものではない。たとえば、「Lonely Planet」シリーズの1993年インド版の表象を論じる Bhattacharyya (1997) や、18世紀の英国のガイドブックを資料の一部として用いる橋本 (2007) などがある。また観光研究に限らない範囲にまで視野を広げると、最近のものでは中欧諸都市の観光名所を扱う加賀美 (2008) や加賀美 (2009) を挙げることができる。こうしたアプローチは、旅行ガイドブック上に表れた文章や図表、つまりテキストを分析の対象に据えるという点で、テキスト論的なものと呼ぶことができる。

一方、テキスト論的なアプローチと異なるもう一つのアプローチがメディア論的なものである。このアプローチでは、個々の旅行ガイドブックの内容よりも、むしろガイドブックというジャンル自体に焦点を合わせ、旅行記や絵葉書、写真集、映画やレコード・CDなど他の媒体とともに、メディアという範疇の中で旅行ガイドブックが分析されている。

そこではとくに、旅行ガイドブックというメディアが旅行者の「現実」を構成する機能が強調されることが多い。たとえば、プーアスティンは「擬似イベント」論の中でガイドブックに触れているし（プーアスティン，1964）、アーリも「観光のまなざし」が現出する場として、ハガキなどの他のメディアとともにガイドブックに言及している（アーリ，1995）。

日本におけるメディア論的な研究は、中川

(1979) のような例もあるが、主に社会学やカルチュラル・スタディーズの分野でなされてきた。山口 (2007) は、日本で出版されたグアムに関する旅行ガイドブックの分析に一章を割き、記載内容やサイズ、日本語以外の旅行ガイドブックとの比較など、多様な角度から考察している。また、山口・山口 (2009) は、日本の海外旅行ガイドブックにおいて無視することができない『地球の歩き方』の歴史に関する文献であり、日本の「海外旅行」の歴史について知識を深める上でも非常に興味深い内容となっている。

旅行ガイドブックだけではなく複数のメディアも含めた研究として考えるならば、ハワイの研究を挙げる必要があろう。たとえば山中 (1993) や山中 (1996) では、ハワイの観光イメージにおけるメディアの役割が論じられており、とくに（山中，1992）では、「観光産業とそれと結託したメディア産業による支配」（山中，1992：3）に注目し、「観光メディア産業複合体」という考えからハワイの観光イメージの生成・移り変わりについて論じている。また矢口 (2002) も、映画やガイドブックを例に日本からのハワイ観光の変遷について論じている。

こうした先行研究について、大きく三つの傾向を指摘することができよう。第一が、デスティネーションやシリーズに関する個別的な傾向である。ほとんどの先行研究は、個別の地域を対象にした旅行ガイドブックか、個別のガイドブック・シリーズを対象に据えている。いいかえれば、特定の地域やシリーズに限らない旅行ガイドブック一般に関する研究はほとんどない。数少ない例外として、海外旅行を実践してきた者の立場からメディアとしての旅行ガイドブックの展開を論じた前川 (2003) を挙げることができよう。

第二がテキスト論偏重の傾向である。この傾向は、とくに観光研究に言えるものである。たしかに、先行研究の多くは、多かれ少なかれテキスト論とメディア論双方のアプローチを含んでいる。けれども、当該の地域を主題に掲げるガイドブックの出版数や件数といった、メディアとしての在り様も考察の射程に取り込んだり、あるいは、先述の前川 (2003) のように、他メディアとの比較

を視野に入れて旅行ガイドブックについて論じる研究を挙げることは決して容易ではない。メディア論的なものに重点を置く研究の方が少数派になるという指摘は否定できないであろう。ただし、旅行ガイドブックの出版や流通の状況が考察されにくいという傾向は、旅行ガイドブックが本質的に持つ性格に起因するとも考えられる。この性格については次章で論じたい。

第三が地域向け偏重の傾向である。この問題は、旅行ガイドブックに地域名が記載されていることを前提にする本稿では議論の対象に含まないものであるが、是非指摘しておきたい。旅行ガイドブックを、旅行者に一般的で実際の情報を提供することを目的にするものと特徴づけるのであれば、そこには、現に出版・流通してきた、地域を限定しない旅行マニュアル本的なものも含まれるべきであろう。けれども、旅行ガイドブックが研究対象になる場合、ある地域のガイドをするものを中心になってくる。この傾向は、観光研究の問題系が特定の場所を軸に構成されていることを示唆するものとも感じられ、それ自体が興味深い考察対象となっている。

2) 目的と意義、本稿の構成

以上の現状をふまえ、上記三つのうちの第一点と第二点の傾向によって看過されてしまう部分を補うために、本稿では、日本社会で出版されてきた海外旅行用のガイドブック一般について論じてみたい。つまり、日本社会、より正確に言えば日本語圏という個別的領域の中で海外旅行ガイドブック一般を扱う、というのが本稿の立場である。

具体的には、海外旅行用のガイドブック全体の傾向を明らかにし、また、デスティネーションとして選出される地域にどのような単位が多く、かつ、どのような地域が好まれてきたのかなどの問題を明らかにし、そうすることで、ガイドブックというメディアの中で、海外旅行の「海外」がどのようなものとして生産されてきたのかについて論じる¹⁾。

本稿の対象は、海外渡航自由化後に出版された海外旅行ガイドブックのうち、シリーズ化されたものの一般に定めているが、さらにその中でも地域

名が特定できるものに限定し、個々のガイドブックに記載された地域名の分析を試みる。たとえて言うならば、本稿は、一冊の旅行ガイドブックを一人の旅行予定者と見立て、6906件の人々（旅行ガイドブック）を対象に、希望する訪問先（ガイドブックの記載地名）についてのアンケート調査を行ったようなものである。対象となった全てのガイドブック・シリーズは表1に示している。

ただし、この「アンケート調査」は複数回答可である。ガイドブックには一つの地域を扱うものだけではなく、たとえば「シンガポールとマレーシア」というタイトルに見られるように、一冊の中で複数の地域を取り上げるものも少なくない。この場合、シンガポールとマレーシアそれぞれに「一票」が投じられることになる。このように、ガイドブックに記載された地域数をカウントし、どの地域に人気があったのか、その特徴や推移について論じたいと思う。

本稿の意義として次のような可能性を指摘できる。第一に、現代日本社会における海外旅行ガイドブックを総体として扱う本稿が、海外旅行ガイドブックという研究対象の全体的な姿をある程度まで提示し、個々の旅行ガイドブックを比較研究する際の参照点となることが期待できる。また、第二点目として、本稿がアウトバウンド・ツーリズムの量や質を計るためのもう一つのパースペクティブとなる可能性を指摘できる。日本のアウトバウンド・ツーリズムの概説書や報告書では、その全体像を示す尺度として旅行者数が引用されることが一般的である。しかし、メディアが旅行実践に多大な影響をもたらすことからすれば、メディアという観点からもツーリズムの規模や特性が明らかにされる必要がある。また、そういった作業によって他地域（あるいは他のメディア圏）との比較やエスニック・メディアとしての旅行ガイドブックの考察も可能になってくる。本稿には、こうした試みに対して一定の貢献を果たすことが期待できる。

最後に本稿の構成について簡単に述べたい。まず次章では、本稿でいう「旅行ガイドブック」について、いくつかの特徴を挙げることで大まかな定義を行い、国立国会図書館のオンライン蔵書目

表1 本研究で調査対象としたシリーズの一覧(シリーズ開始年順)

番号	シリーズ名	出版社	開始年～終了年	2008年までの 出版点数	調査対象 点数	調査対象 の出版期間	タイトルの例
1	外国旅行案内, 世界旅行案内	日本交通公社, 日本交通公社出版事業局	1952～1977	11	5	1964～1977	
2	JTBガイドブック	日本交通公社	1963～1969	8	6	1964～1969	
3	世界の旅: 座宝宝刊行会	小学館, 河出書房新社	1964～1972	52	52	1964～1972	
4	山溪カラーガイド	山と溪谷社	1966～1980	87	4	1969～1978	
5	ブルーガイド海外版	実業之日本社	1966～1989	58	57	1966～1989	
6	ダイヤモンドハンドガイド/世界の都市	ダイヤモンド社	1968～1969	8	8	1968～1969	
7	パン・トラベル・ガイド	パン・ニューズ・インターナショナル	1969～1983	32	31	1969～1983	
8	Hakuryosha overseas travel series	白鹿社	1970～1973	12	9	1970～1973	
9	世界の旅: 国際情報社	国際情報社	1970～1972	20	20	1970～1972	
10	トラベルブックス	世界文化社	1970～1973	22	22	1970～1973	
11	世界の旅: 中央公論社	中央公論社	1970～1972	24	24	1970～1972	
12	ワールドガイド	日本交通公社, JTB	1970～2008	333	324	1970～2008	
13	…の旅	ワールド・フォト・プレス	1972～1973	10	9	1972～1973	『韓国の旅』(1972), 『インドの旅』(1973) など
14	ポケットガイド	ワールド・フォト・プレス	1973～1973	4	4	1973～1973	
15	海外旅行シリーズ	西東社, 白馬出版	1973～1986	25	18	1973～1986	
16	食べ物・買い物・散歩道	白馬出版	1974～1981	2	2	1974～1981	『ヨーロッパ食べ物・買い物・散歩道』(1981) など
17	交通公社のワールドガイド	日本交通公社出版事業局	1975～1986	28	18	1975～1982	
18	エアリアマップ	昭文社	1975～2002	1019	18	1998～1999	
19	交通公社のポケット・ガイド	日本交通公社出版事業局	1975～1990	105	41	1979～1990	
20	あむかす・旅のメモ	あむかす事務局	1975～1987	48	41	1976～1986	
21	コロンブックス	三修社	1975～1989	104	75	1975～1986	
22	ワールド・トラベル・ブック	ワールドフォトプレス	1975～1989	132	132	1975～1989	
23	地球は狭いわよ	山と溪谷社/地球は狭いわよ	1976～1990	20	11	1984～1990	
24	ブルーガイドJALシティガイド	実業之日本社	1976～1977	33	33	1976～1977	『若い人のためのアメリカ旅行』(1979) など
25	トラベル	新声社	1977～1980	15	11	1977～1980	
26	朝日旅の百科	朝日新聞社	1978～1985	76	43	1979～1985	
27	交通公社のmook	日本交通公社出版事業局	1979～1988	46	8	1983～1988	
28	ポケットガイド・シティー	パン・ニューズ・インターナショナル	1979～1982	10	10	1979～1982	
29	地球の歩き方	ダイヤモンド・ビッグ社	1979～継続中	1910	1631	1979～2008	
30	ワイルドムックスベシヤル	ワールドフォトプレス	1981～1986	11	12	1981～1986	
31	ブルーガイド情報版	実業之日本社	1981～継続中	181	16	1998～2007	
32	Your guide	ゆう出版局	1981～1994	21	19	1981～1994	
33	ブルーガイドバック・ワールド	実業之日本社	1981～1995	25	25	1981～1995	
34	エアリアガイド	昭文社	1981～1998	222	61	1982～1996	
35	シティ・ウォーキング・ブック	ワールドフォトプレス	1982～1984	5	5	1982～1984	
36	海外ブレイタウン	新声社	1982～1986	6	6	1982～1986	
37	トラベルジャーナル新書	森谷トラベル・エンタプライズ	1982～1983	12	7	1982～1983	
38	交通公社のるるぶガイド	日本交通公社出版事業局	1982～1988	14	11	1983～1988	
39	カラーガイド	三修社	1982～1986	24	17	1982～1986	
40	オレンジ・トラベル・プレス	笠倉出版社	1982～1994	38	27	1982～1993	
41	旅のガイドムック	近畿日本ツーリスト	1982～2001	168	138	1982～2000	
42	オデッセイトラベルハンドブック	グループ・オデッセイ	1983～1987	2	2	1983～1987	

表1 つづき

		1983～継続中	20	12	1994～2008	『観光コースでないウィーン』(2004)など
43 観光コースでない	高文研	1983～継続中				
44 世界を食べる旅	講談社	1984～1985	5	5	1984～1985	
45 ブルーガイド・パシフィカ	実業之日本社	1984～1996	19	19	1984～1996	
46 ブルーガイド・ムック	実業之日本社	1985～継続中	114	5	1997～2005	
47 …グラフィティ	みずうみ書房	1985～1988	8	8	1985～1988	『韓国グラフィティ』(1985年)など
48 宝島スーパーガイド	JICC出版局	1985～1990	17	17	1985～1990	
49 絵ときガイド	日本交通公社出版事業局	1986～1988	4	4	1986～1988	
50 みずうみガイドブックス	みずうみ書房	1986～1987	4	4	1986～1987	
51 ニューコロンブックス	三修社	1986～1987	4	4	1986～1987	
52 旅術ゼミナール	リクルート	1986～1987	5	5	1986～1987	
53 トラベルjoy別冊	山と溪谷社	1986～1988	8	8	1986～1988	
54 World guide	日地出版	1986～1993	18	18	1986～1993	
55 Pia mooks	ぴあ	1986～2006	399	28	2001～2003	
56 World guide books	教育社	1987～1987	19	19	1987～1987	
57 カドカワトラベルハンドブック	角川書店	1987～1994	63	61	1987～1994	
58 New ワールドガイド	日本交通公社出版事業局	1988～1990	9	2	1988～1988	
59 ふだん着の…案内	晶文社	1988～1997	7	7	1988～1997	『ふだん着のソウル案内』(1988年)など
60 MM ガイド	昭文社	1988～1990	8	8	1988～1990	
61 海外たべあるき・ショッピング	昭文社	1988～1990	9	9	1988～1990	
62 世界一等旅行	ラテラネットワーク	1988～1991	13	13	1988～1991	
63 海外フリータイムガイド	昭文社	1988～1992	13	13	1988～1992	
64 世界の街案内	近畿日本ツーリスト	1988～1989	16	16	1988～1989	
65 フリーダム/自遊自在	日本交通公社出版事業局	1988～1992	20	17	1988～1991	
66 JTBのるるぶ情報版	日本交通公社出版事業局	1988～1993	142	17	1991～1993	
67 World guide 地図の本	日地出版	1988～1993	23	23	1988～1993	
68 ワールドブレイ	日本文華社	1989～1989	2	2	1989～1989	
69 モネの本	スコラ	1989～1989	2	2	1989～1989	
70 海外・旅のデーターバンク	昭文社	1989～1990	10	9	1989～1990	
71 地球の歩き方(フロンティア)	ダイヤモンド・ビッグ社	1989～1992	20	20	1989～1992	
72 最新ショッピングガイド	平凡社	1989～1994	28	28	1989～1994	
73 ワールドjoy	山と溪谷社	1989～1992	33	33	1989～1992	
74 JAL ショッピングダイニング・ガイド	日本航空文化事業センター	1989～1999	44	44	1989～1999	
75 世界あっちこちYHガイドブック	日本ユース・ホステル協会	1990～1990	2	2	1990～1990	
76 タウン・マニユアル	駿タテ出版	1990～1990	4	4	1990～1990	
77 ロンリー・ブライネット	マガジンハウス	1990～1992	5	5	1990～1992	
78 知の旅	クレオ	1990～2007	7	7	1990～2007	
79 海外旅文庫	昭文社	1990～1990	13	13	1990～1990	
80 全日空シティガイド	三推社	1990～1997	23	23	1990～1997	
81 JTBのポケットガイド	日本交通公社出版事業局, JTB	1990～2001	166	91	1990～2001	
82 ひとりでける世界の本	日地出版	1990～1998	143	143	1990～1998	
83 アジャールガイド	双葉社	1991～1991	2	2	1991～1991	
84 アジア歴史散歩	山川出版	1991～1997	6	6	1991～1997	
85 Travel guide book	光星社	1991～1992	9	9	1991～1992	
86 ミシュラン・グリーンガイド	実業之日本社	1991～1999	18	18	1991～1999	
87 JTBのmook	JTB, JTBパブリッシング	1991～継続中	477	19	1995～2002	
88 TRAJAL books	トラベルジャーナル	1991～2001	46	27	1991～2000	

表1 つづき

89	ブルーガイド・ワールド	実業之日本社	1991～1998	33	33	1991～1998	
90	JTBのmook マイ・バスポート	日本交通公社出版事業局	1991～1994	38	38	1991～1994	
91	ハンディガイド	近畿日本ツーリスト	1991～1995	44	44	1991～1995	
92	JTBのフリーダム	日本交通公社出版事業局, JTB	1991～1999	55	50	1991～1999	
93	るるぶ情報版	JTB パブリッシング	1991～継続中	3192	457	1991～2008	
94	ゴールデンブック	Bonechi	1992～1997	5	5	1992～1997	
95	講談社ゆ〜ゆ〜ブック	講談社	1992～1993	13	13	1992～1993	
96	旅行情報ノート	旅行人	1993～1995	2	2	1993～1995	
97	新日本法規出版	新日本法規出版	1993～1993	5	5	1993～1993	
98	世界の旅と観光	主婦と生活社	1993～1996	6	6	1993～1996	
99	Jガイドマガジン	山と溪谷社	1993～継続中	97	7	1994～2005	
100	ニューガイドワールド	弘済出版社	1993～1999	35	35	1993～1999	
101	びあ map	びあ	1994～1994	10	3	1994～1994	
102	アジア・カルチャージャガイド	トラベルジャーナル	1994～1995	14	14	1994～1995	
103	望遠郷	同朋舎出版	1994～1997	16	16	1994～1997	
104	びあ mook	びあ	1994～継続中	594	29	2004～2008	
105	ニューガイドα	弘済出版社	1995～1995	3	2	1995～1995	
106	J guide world	山と溪谷社	1995～1997	2	2	1995～1997	
107	旅行ガイドにないアジアを歩く	梨の木舎	1995～2003	5	4	1995～2003	
108	旅の手帖情報版	弘済出版社	1995～2007	124	9	1996～1998	
109	街物語	日本交通公社出版事業局, JTB	1995～1997	10	10	1995～1997	
110	ジェイ・ガイドマガジン	山と溪谷社	1995～継続中	11	11	1995～2001	
111	Gulliver: travel guide book	マガジンハウス	1995～1999	12	11	1995～1999	
112	アジア楽園マニユアル	双葉社	1995～1999	15	13	1995～1998	【好きになっちゃった台北】(1995) など
113	ショトルトラベル Shotor travel	小学館	1995～2008	59	17	1998～2008	
114	旅のガイドムック まめ	近畿日本ツーリスト	1995～2000	34	34	1995～2000	
115	マル得マニユアル	小学館	1996～2001	4	2	1996～2000	【ハワイ個人旅行(得) マニユアル】(1996) など
116	トラベルmook	弘済出版社	1996～2002	23	2	1996～1999	
117	グローバルプレス	教育出版センター	1996～1999	3	3	1996～1999	
118	笑うスチュワーデス	イカロス出版	1996～2001	6	4	1998～2001	
119	トラベル事典	郁文堂	1996～2001	4	4	1996～2001	
120	アウトレットベストセジャルブック	ラテラネットワーク	1996～1998	9	9	1996～1998	
121	旅行人ノート	旅行人	1996～2007	16	16	1996～2007	
122	ツリーリスト情報版	近畿日本ツーリスト	1996～2005	88	28	1996～2003	
123	ニューガイドワールドα	弘済出版社	1997～1997	4	2	1997～1997	
124	アジアの遊び方	イマジン	1997～1998	2	2	1997～1998	
125	Figaro travel books	ティビーエス・ブリタニカ	1997～1998	4	4	1997～1998	
126	Asian activity guide	トラベルジャーナル	1997～1997	6	6	1997～1997	
127	海外旅行選書	日地出版	1997～1998	13	10	1997～1998	
128	世界遺産を旅する	近畿日本ツーリスト	1997～1999	12	12	1997～1999	
129	夜の歩き方	データハウス	1997～2006	22	22	1997～2006	
130	JAL guide	JAL ブランドコミュニケーション	1997～2008	38	38	1997～2008	
131	個人旅行	昭文社	1997～2003	73	73	1997～2003	
132	わがまま歩き	実業之日本社	1997～継続中	136	136	1997～2008	
133	旅名人ブックス	日経 BP 企画	1997～継続中	234	232	1997～2008	
134	J pocket	山と溪谷社	1998～1998	4	4	1998～1998	

表1 つづき

135	Holiday city guide	近畿日本ツーリスト	1998～1998	5	5	1998～1998	
136	はいはい旅団世界の楽園	産業編集センター	1998～2003	8	7	1998～2002	
137	昭文社ムック	昭文社	1998～継続中	43	14	1998～2007	
138	地球の歩き方ムック	ダイアモンド・ビッグ社	1998～2002	18	18	1998～2002	
139	世界を旅する人のイエローガイド	ユーロプレス	1998～2008	91	86	1998～2008	
140	Seibido mook	成美堂出版	1998～継続中	1134	95	1999～2008	
141	ニューツアーガイド	ゼンリン 地出版	1998～2001	111	111	1998～2001	
142	地球の歩き方リゾート	ダイアモンド・ビッグ社	1998～継続中	125	119	1998～2008	
143	ワールド・スキャナ	プロトギャラクシー	1999～1999	2	2	1999～1999	
144	地球の歩き方アイ・マップ・ガイド	ダイアモンド・ビッグ社	1999～1999	3	3	1999～1999	
145	びあ map シリーズ	びあ	1999～2000	27	3	1999～2000	
146	アジア・シティファイル	双葉社	1999～1999	3	3	1999～1999	
147	お値打ち	メディアファクトリー、講談社	1999～2008	7	8	1999～2008	『お値打ちハワイ』(1999) など
148	無敵の…	アスベクト	1999～継続中	12	10	1999～2008	『無敵のバリ』(1999) など
149	シーズムック	シーズ情報出版	1999～継続中	62	12	1999～2008	
150	ナショナルジオグラフィック海外旅行ガイド	日経ナショナルジオグラフィック社	1999～2007	24	24	1999～2007	
151	ヨーロッパ・ハイキングガイド	山と溪谷社	2000～2000	3	3	2000～2000	
152	クラブツーリズム選書	近畿日本ツーリスト	2000～2002	5	5	2000～2002	
153	J guide magazine	山と溪谷社	2000～継続中	53	5	2000～2006	
154	旅行人ウルトラガイド	旅行人	2000～2006	6	6	2000～2006	
155	インターネット得海外旅行術	オデッセウス	2000～2001	7	6	2000～2001	『旅のネタホームページ300.アジア編』(2000) など
156	1日～000円	双葉社	2000～2003	7	7	2000～2003	『1日5000円ぜいたく旅タイ』(2000) など
157	歩く…	ぶれすアルファ	2000～2003	26	24	2000～2003	『歩くバリ』(2000), 『歩く上海』(2003) など
158	ガールズ・トラベラーズ・ファイル	双葉社	2000～2008	29	28	2000～2008	
159	ベストガイド	成美堂出版	2000～継続中	215	56	2003～2008	
160	マップマガジン	昭立社	2000～継続中	1270	200	2000～2008	
161	知的でゆてかな旅	学習研究社	2001～2001	2	2	2001～2001	
162	解説!	雷鳥社	2001～2002	2	2	2001～2002	
163	エイビロードホテルコレクション	リクルート	2001～2002	4	4	2001～2002	
164	好きになっちゃったアジア	双葉社	2001～2003	8	6	2001～2003	
165	イラスト徹底ガイド	メイツ出版	2001～2006	6	6	2001～2006	
166	ワールドガイド街物語	JTB	2001～2001	7	7	2001～2001	
167	コンブリート・ガイドブック	新潮社	2001～2005	7	7	2001～2005	
168	クレアドウエトラベラー	文藝春秋	2001～2006	16	12	2001～2005	
169	攻略本	東京書籍	2001～2003	14	14	2001～2003	
170	週刊朝日百科・世界100都市	朝日新聞社	2001～2003	60	60	2001～2003	
171	トラベルトーク	学習研究社	2002～2002	2	2	2002～2002	
172	エフ・トラベル	主婦の友社	2002～継続中	7	5	2002～2006	
173	カルチャーガイド<トラベラー>	トラベルジャーナル	2002～2003	10	10	2002～2003	
174	ガイド・マップナビ	マガジンハウス	2002～2004	10	10	2002～2004	
175	地球の歩き方ブラズ・ワン	ダイアモンド・ビッグ社	2002～2006	13	13	2002～2006	
176	地球の歩き方mook	ダイアモンド・ビッグ社	2002～継続中	57	43	2002～2008	
177	地球の歩き方ポケット	ダイアモンド・ビッグ社	2002～継続中	115	115	2002～2008	
178	クロスカルチャーライブラリー	スリーエーネットワーク	2003～継続中	8	4	2003～2007	
179	ロンリープラネットの自由旅行シティガイド	メディアファクトリー	2003～継続中	6	6	2003～2008	
180	ものしり紀行	新潮社	2003～2008	7	7	2003～2008	

表1 つづき

181	ロンリープラネットの自由旅行ガイド	メディアファクトリー	2003～継続中	24	24	2003～2008	
182	トラベルストーリー	昭文社	2003～2007	42	42	2003～2007	
183	いい旅・街歩き	成美堂出版	2003～継続中	58	58	2003～2008	
184	Madame figaro voyage Japon	阪急コミュニケーションズ	2004～2005	3	3	2004～2005	
185	スチュワーデスの(秘)旅ガイド	イカロス出版	2004～2005	5	5	2004～2005	
186	エクスプロア	山と溪谷社	2004～2008	8	5	2004～2008	
187	行くべし	ソニー・マガジンズ	2004～2008	7	6	2004～2008	『行くべしオアフ島見るべしオアフ島』(2004) など
188	1週間	メディアファクトリー	2005～継続中	3	3	2005～2007	『1週間パリ』(2006) など
189	大人の煙草ガイド	実業之日本社	2005～2008	5	5	2005～2008	
190	行きたい街を歩く	西東社	2005～2006	7	7	2005～2006	
191	Gokutabi	ソニー・マガジンズ	2005～2006	8	7	2005～2006	
192	新・個人旅行	昭文社	2005～2006	11	11	2005～2006	
193	フィガロジャボンヴォヤージュ	阪急コミュニケーションズ	2005～継続中	12	12	2005～2008	
194	わがまま歩きツアーズ	実業之日本社	2005～継続中	21	21	2005～2008	
195	地球の歩き方 books	ダイワモンド・ビッグ社	2005～継続中	47	23	2006～2008	
196	フラヌール	NOVA	2005～2006	23	23	2005～2006	
197	…のかわいい本	二見書房	2006～継続中	1	1	2006～2006	『イギリスのかわいい本』(2006) など
198	Rurubu恋する	JTBパブリッシング	2006～2006	2	2	2006～2006	
199	てくてく	ワニブックス	2006～2008	5	3	2006～2008	『てくてくドイツ』(2006) など
200	もっと好きになっちゃった	双葉社	2006～2008	6	4	2007～2008	
201	私のとっておき	産業編集センター	2006～2008	14	14	2006～2008	
202	旅ボン	ゴマブックス	2007～継続中	3	1	2007～2007	
203	楽園リゾート	JTBパブリッシング	2007～2007	2	2	2007～2007	
204	自由旅行マニュアル	三才ブックス	2007～2008	3	3	2007～2008	
205	滞在旅行	エディスタ	2007～継続中	4	4	2007～2008	
206	世界の旅	宗像映像出版社	2007～2008	4	4	2007～2008	『美しき中欧4カ国』(2008) など
207	ララチャッタ	JTBパブリッシング	2007～継続中	25	25	2007～2008	
208	新個人旅行	昭文社	2007～2008	46	46	2007～2008	
209	ポップ・トリップ	ソフトバンククリエイティブ	2008～継続中	1	1	2008～2008	
210	たびんど!	イカロス出版	2008～継続中	1	1	2008～2008	
211	アジアの新しい旅	河出書房新社	2008～継続中	1	1	2008～2008	
212	トランジット	講談社	2008～継続中	3	3	2008～2008	
				計	6906		

(注) 2009年も発刊されているものは「継続中」とした。ただし、数年後に次の巻が出版されることがあるので、「継続中」は一応の目安と考えられたい。

録を用いた調査法について説明する。第3章では、現在までの分析によって明らかになったこととして、旅行ガイドブックの出版状況の概要、デスクトップ・ネイションとなる地域の単位、そして大陸別ならびに地域別に見た推移という項目に分けて解説する。最後に結論では、全体の議論をまとめ、今後の課題について述べることにしたい。

なお、以下の文中で「ガイドブック」と言う場合、とくに断りがない限り、海外旅行向けのものを指していることを了解されたい。

II 研究対象と調査法

1) 本稿における“旅行ガイドブック”

冒頭でふれた『現代観光学キーワード事典』では、「旅行案内書」を「旅行関連情報を提供することを目的とした出版物」（前田，1998：15）というように幅広く定義し、「通常、自然・歴史・文化など旅行目的地を理解するために必要とされる情報に加え、交通・宿泊・飲食・土産品・観光ルートなど、観光を行う際に必要とされる情報が掲載される」と位置付けている。

本稿ではこの定義を出発点として、日本社会の例を念頭に置き、ガイドブックに類似する出版物のジャンル、すなわち紀行や旅行記（以下紀行で統一する）と比較対照することでガイドブックの特徴を探ってみたい。

まず形式について比較してみよう。紀行は著者の旅行のプロセスに沿って記述が進み、そこでの体験談・印象・思索が物語られるという形式が基本にあると言っていい。これに対してガイドブックは通常、地域など一つのテーマを項目別に分けて解説するレファレンス・ブック、参考図書のような形式をとっている。

『図書館情報学用語事典』（日本図書館情報学会用語辞典編集委員会，2007：258）では「レファレンス・ブック」を、「対象とする分野の関連情報を記事として多数の項目にまとめ、それらを音順や体系順で排列することによって、特定の項目を容易に調べられるようにした図書」と定義している。「音順」を省けば、この定義はそのまま旅行ガイドブックにも当てはまるであろう。一般的

に言ってガイドブックでは、当該国への移動・入国方法や地域の概要、さらに各地の見どころ、宿泊施設、飲食施設などなど、複数の項目が整然と配置されている。項目体系にしたがって分かりやすく構成されている様は、まるで事典のようである。その好例が、英語のガイドブック・シリーズ「Lonely Planet」であろう。このシリーズは、基本的に写真が少なく白黒で分厚い仕様になっており、味もそっけないと言いたくなるような事典的外見を呈している。

そもそもガイドブックに要求されるのは、あくまでも情報のたしかさである。いうなれば、紀行が著者の信奉者・心酔者にとって聖典となりうるのに対して、ガイドブックはつねに検証の目にさらされている。入手しうる情報の中でガイドブックのそれが最も正確なのであれば、ドイツのガイドブック・シリーズ「ベデカー」のように（中川，1979）、戦争のために利用されることさえあるのである。

次に、内容の面でも両者を対照させることができる。紀行の場合、特定の地域を取り上げていたとしても、その記述は作者の関心に合わせた特殊・限定的なものであることが多い。著者の個人的な思考・印象・趣味にもとづいて、著者が興味を持つ、もしくは著者の専門の事物が中心的に取り上げられる。著者の嗜好／志向に合う読者には最適の案内書たりうるが、そうでない場合はガイドとして機能しにくいものになる。

一方で旅行ガイドブックは、こうした特殊性・限定性とは対極にあり、むしろ多様な人が利用できるように、汎用的な情報を包括的に提示することが目指される。たとえ歴史や建築、食習慣、ブランド品、性風俗など、個別的な事物がテーマになったとしても、第一に重視されるのは、それは何かという事実の解説やどこに何があるかという案内の指示に関する正確さであり、先の表現をもう一度用いるとすれば、レファレンス的な精度が問題になるのである。不特定多数の旅行者にとっても使い勝手があるという点で“実用的”と表現することも可能であろう。

三点目が著者についてである。一般に紀行というと、有名な作家や学者、テーマになる事物の専

門家（こういってよければ知識人）による書物が想起されるにちがいない。たとえば日本でいえば司馬遼太郎などである。もちろん“素人”によって著された紀行も存在する。けれども「紀行文学」というジャンルが文学の中に存在することはガイドブックとの比較上無視できない事実である。というのも、ガイドブックの場合、有名な人が作ったガイドブックを挙げるの方が困難だからである。あるとすれば、特定のスタイルの旅行に通じた人物によるシリーズであろう²⁾。しかしむしろ、著者個人の名が奥付に記されていないガイドブックの方が一般的なのではないか。要するに、ガイドブックは無名的なのである。

書籍の類型という面ではどうか。ガイドブックにはシリーズ物が多い。この傾向は、今日旅行ガイドブックの元祖のように扱われる『ベデカー』や『マレー』にすでに現れている³⁾。“シリーズ”とは、図書館学での各種の定義を参考にすると、全体に共通するタイトル（シリーズ名）と固有のタイトルや番号を持つ各巻とで体系的に構成される一群の書籍となる⁴⁾。そこでは、特定の要素（発行者、方針など）が維持されつつ、シリーズの明確な終期が予定されずに、各巻が継続的に刊行されていく。

このように、逐次刊行物的な性格を持つ点で、ガイドブックは雑誌や年鑑と似ている。ただし、出版のサイクルに関して言えば、ガイドブックの方が不定期的である。一方、こうした逐次刊行物的なガイドブックと比べて紀行は、たしかにシリーズものは珍しくないとしても、むしろ一度のみ単独で出版される単行物（あるいは単行書）の存在が目立つ。紀行とみなされる書物の中に、ダイヤモンド・ビッグ社の「地球の歩き方」シリーズのような、毎年改訂して刊行される“年鑑”的なものがあるかという点、とくに思い当たらない。このことから、紀行が逐次刊行物ではなくむしろ単行物であることは明白であろう。

同じ逐次刊行物である雑誌と比べるとどうか。雑誌の特徴として、速報性を重視する点、内容（記事）の面で多様・雑多である点、広告の量が多い点、簡便な形態を持つ点、発行が容易である点、そしてすでに触れた継続的に刊行される点な

どを挙げることができる（図書館情報学ハンドブック編集委員会、1993: 211-213）。速報性や多様・雑多性、広告志向の三点は、旅行ガイドブックと旅行専門雑誌を分けるポイントになっていると言えよう。簡便さや発行の容易さの面で雑誌的である書籍つまりムックの形態を取る旅行ガイドブックも珍しくないが、上記三点の性格を持つガイドブックは、たとえ存在したとしても、少数派にとどまるにちがいないと思われるからである。

紀行とガイドブックの違いとして最後に挙げたいのが、一般の図書館での取り扱い方である。ガイドブックは、学校教育で用いられる教科書と同じように、基本的に図書館に保存されない。新聞のように縮刷版になることもない。中川（1979）も指摘しているが、いわば“使い捨て”の出版物である。立教大学の図書館でも、「地球の歩き方」シリーズなど、毎年版を変えて刊行されるガイドブック類は残念ながら処分されている。そのため、ガイドブックの研究は、国の中央図書館である国立国会図書館（後述）の存在なしにはあり得ないというのが現状である。前章で触れた、ガイドブックをメディアとして研究対象に据えることの難しさはここに起因すると言える。

以上の議論をまとめたのが表2である。それをもとに、多少冗長になるが、ガイドブックを次のように位置付けておこう。ガイドブックとは、実際に旅行するために当事者にとって必要とされる情報を不特定多数の人々に対して包括的・汎用的に提供するレファレンスの書籍である。また、シリーズ的なものが多いという特徴や、有名な人物が著者になることが少ない傾向、さらには、図書館に保存されることが少ないという傾向も持つ。

表2 紀行とガイドブックの違い

	紀 行	ガイドブック
形式	物語的	項目別的
内容	特殊的・限定的	包括的・汎用的
著者	有名的	無名的
類型	単行書が多い	逐次刊行物が多い
取扱	図書館で保存	使い捨て

2) NDL-OPAC を用いた調査

次に、調査の方法についてのべたい。本稿では、国立国会図書館のウェブサイトで公開されているオンライン蔵書目録（NDL-OPAC）によって、戦後に出版されたガイドブックを検索し、NDL-OPACで“タイトル”や“各巻タイトル”として登録された地域名をデータベース化するという作業を行った。なお、より完全に近いデータベースを構築するために、実物を目にするのができたものや、ウェブサイト“アマゾン”（www.amazon.co.jp）で表紙や目次を見ることができたものがあつた場合、そこでの記載も参考にした。

上述のように、一般の図書館で閲覧できるガイドブックは限られているので、出版されてきたガイドブック全般について知ろうとなると国立国会図書館がもっとも便利な施設になる。よく知られるように、同館は「一国の知的遺産としての国内出版物」を納本制度によって網羅的に収集・保存することを目的にした施設である（NDL入門編集委員会，1998：117）。この納入制度とは（NDL入門編集委員会，1998：129-132）、「国立国会図書館法」の納本関連条項にもとづく制度であり、民間の出版物の中で市販される図書類は日本出版取次協会を通じて納入されることになっている。自費出版など同協会が取り次ぎがないものについては、来館や郵送による納入という方法に頼ることになる。ただし納入といっても、納入される出版物に対して、定価の4割から6割の「納入出版物代償交付金」が支払われるので、実質的には同図書館が納入物を割引料金で購入していると言っていい。

市販の出版物はすべて自動的に同図書館に保管されると思われるがちであるが、ガイドブックの中には、「改訂版」という記載からすると納本されていないと思わざるを得ないものも存在することが分かった⁵⁾。先に、一部ウェブサイト“アマゾン”も参考にしたいと書いたが、それはこうしたデータの欠如をできるだけ補いたいと考えたからである。

NDL-OPACでは、旅行ガイドブックが含まれることが多い範疇、すなわち「日本十進分類法」（NDC）では290番台の「地理・地誌・紀行」、

「国立国会図書館分類表」（NDLC）ではY77の「児童図書・簡易整理資料・教科書・専門資料室資料」内の「スポーツ・娯楽」という二つの分類を軸に⁶⁾、旅行ガイドブックを検索していった。現在本稿を執筆している時点で、本稿の対象となる「シリーズ化された旅行ガイドブック」だけでも7000点を超えている。すでに述べたように、本稿では、その中でも1964年から2008年までの間に出版されたものを対象にすることにしたが、以下では限定の基準について述べたい。

3) 対象の限定

まず本稿でいうシリーズとは、国立国会図書館においてシリーズとして登録されたものとは必ずしも一致するわけではないことを断っておきたい。NDL-OPACには「シリーズ名」という項目があり、ガイドブックの多くはそこにシリーズ名が表記されている。けれども、先の定義にもとづいて判断すれば明らかにシリーズ的であるにもかかわらず、NDL-OPACにはシリーズとして登録されていないものも少なくない。そこで本稿では、シリーズ物という大枠を設定しつつも、できる限り多くのガイドブックを対象にすることを目指し、タイトル名の組み合わせでシリーズと判断するものも対象に加えることにした。表1の「タイトルの例」という欄において解説を加えているシリーズはこうしたものである。

また、「シリーズ」に絞る理由は、日本で旅行ガイドブックとして出版されるもののほとんどがシリーズ物として刊行されるという点にある。同じことは、欧米諸国など、他の国々にも当てはまるのではないと思われる。そもそも、先に触れたような“旅行ガイドブックの元祖”もシリーズものであった。もちろんシリーズ物ではないガイドブックもけっして少なくないし、そういったガイドブックとシリーズ物のガイドブックのそれぞれの量を比較する作業は重要であるが、本稿では、大量に出版されるガイドブックを何らかの形で限定する必要性から、その点は重視しないことにした。今後の課題としたい。

次に、対象を1964年から2008年までに出版された文献に限定する理由についても述べておきた

い。本研究を進める過程で明らかになったのは、1964年のいわゆる海外渡航自由化を境に海外旅行ガイドブックが徐々に増加していったということであった。それ以前に刊行されたガイドブック・シリーズは、日本交通公社の「外国旅行案内」数点と「JTBガイドブック」シリーズの『アロハハワイ』（1963）くらいである⁷⁾。両方とも自由化以降も継続しているが、とくに前者はJTBパブリッシングの編集者に言わせれば「政府の公式ガイドみたいなもの」（旅行作家の会、2006：197）である⁸⁾。本稿では、一般的な意味でのガイドブックが出るようになるのは自由化以降と考え、調査対象となる期間のスタート点を1964年に設定することにした。

一方2008年までという限定は、純粹に本稿の執筆の時期との関連に基づく。2009年初頭の調査経験からすれば、2009年12月までに出版されたガイドブックの中には、本稿の執筆時点で未だNDL-OPACで参照ができないものがあると想定される。そのため本稿では、出揃っていることが確実な、NDLCにおいて「出版」の時期が2008年12月までになっているものだけを対象にすることにした。

ただし、こうした期間に出版されたシリーズ物といっても、その中でさらに対象から除外したものがある。調査対象たるシリーズの中から除外したシリーズと、各シリーズ内で除外した巻である。

まず前者に含まれる第一のものが、紀行的な性格の強いシリーズである。先の紀行の特徴に基づいて、タイトル、著者名、目次と内容（目にすることができたもののみ）、さらに各シリーズ内での紀行的巻の割合から、紀行的可否かを判断した。たとえばリポートの「旅の本」、図書出版社の「海外旅行選書」、NTT出版の「気球の本」、岩波書店の「シリーズ旅の本箱」の各シリーズはすべて紀行的として除外している。

次に、留学やワーキングホリデー、ロングステイ、語学学習をテーマとするシリーズも省いた。たとえば、ダイヤモンド・ビッグ社の「地球の歩き方：成功する留学」シリーズや、情報センター出版局の「旅の指さし会話帳」シリーズなどがそれに当たる。とくに語学学習の場合は「英会話」

のように地域を限定することにはたして意味があるのかと疑問に思うものもあり、基礎的な研究としての本稿の位置づけを重視して、本稿では観光旅行目的のガイドブックに焦点を当てることにした。

また、ガイドブック・シリーズの中には、海外旅行や国内旅行だけではなく、旅行以外のテーマを扱う巻・号が混在しているものも珍しくない。後述するように、こうした場合本稿では、シリーズの中で海外旅行を扱うものだけをカウントしている。けれども、旅行以外のテーマが多数であり、旅行がシリーズの中心的なテーマとは考えられない場合は、調査対象から除外した。こうした部類に属するものは、文潮出版の「ダブルブックス」、角川書店の「カドカワムック」、河出書房新社の「kawade 夢文庫」、光文社の「光文社女性ブックス」、オークラ出版の「Oak-mook」、イカロス出版の「イカロス mook」、ソニー・マガジンの「ソニー・マガジンズデラックス」、阪急コミュニケーションズの「figaro books」の各シリーズなど、けっして少ないものではない。ちなみにこれらの、旅行とは関係ないシリーズの中の“予備的に組み込まれる旅行ガイドブック”という範疇もそれ自体興味深い考察対象であることは指摘しておきたい。

さらに、シリーズ的なタイトルを持っても1点しか出版されず事実上シリーズとならなかったものも省いた。たとえば開創社の『海外旅行ガイド』シリーズ（1979）、双葉社の『バックパッカーズマップ・シリーズ』（1999）がある。ただし、イカロス出版の『たびんご！』シリーズのように、2008年12月の時点で一冊しか出版されていないものの、2009年以降も継続しているシリーズは対象に加えている。

以上、調査対象から除外したシリーズについて述べたが、つづいて、各シリーズ内で除外した巻について述べたい。表1で「2008年までの出版点数」と「調査対象点数」の間に差が生じているのは、以下のように除外した巻があるからである。

第一が地域名の記載がないものである。旅行ガイドブックと言えば、たいていの人が、どこか特定の地域を扱ったものを思い浮かべるであろう。

しかし実際には、地域名の有る巻を主体にしつつも、とくに地域名を挙げずに、海外旅行マニュアルやウェディング、ハネムーン、飲食物、リゾート、ボランティアなどをテーマにする巻が含まれるシリーズも珍しくない。たとえばダイヤモンド・ビッグ社の「地球の歩き方」シリーズでもボランティアをテーマにした巻が1997年、1999年、2008年の3冊刊行されている。こうした場合、該当する巻は調査対象から省いた。

次に、海外旅行のためのガイドブックばかりのシリーズで、日本国内をテーマにする巻が含まれることもある。たとえば双葉社の「好きになっちゃったアジア」シリーズには沖縄を扱う巻が2冊（2002年と2003年）含まれている。また一方で、たとえばクラップス社の「ニューガイドワールドαワンテーマ海外旅行」シリーズの『世界のメニユーガイド』（1997）や、実業之日本社の「ブルーガイド海外版」シリーズの『世界一周空の旅』（1968）などのように、NDL-OPAC上では地域を特定できない巻もあるがシリーズに含まれる場合もある。このような「世界」や「地球」より下位の分類が分からない巻も対象から外した。

最後に、シリーズの中で留学やワーキングホリデイ、ロングステイ、語学学習など、観光旅行以外のテーマを掲げている場合も対象に含めないことにした。理由は、先述のシリーズにおける同種のもの除外と同じである。

以上の限定の結果、表1にあるように、本稿で考察の対象にするガイドブック・シリーズは計212件、点数では6906点に上ることになった。

4) 地域名の抽出

最後に、この節ではガイドブックに記載された地域名の抽出方法について述べたい。本稿では、記載された地域名を、本稿で用意した“大陸”と“国家”という階層で構成される分類体系に当てはめて整理していった（表3）。

大陸は、五大大陸を基に、頻繁に現れる地域を中心に、12個に分類した。さらに国家のレベルでも、実際に国際法上独立国家として承認されているかどうかなどの問題は考慮せずに、頻繁にデステイネーションとして選ばれる地域を念頭に置いて

表3 本稿で用いる地理分類

“大陸”	“国家”
東アジア	韓国、北朝鮮、中国、モンゴル、台湾、香港、マカオ
東南アジア	ベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ブルネイ、東チモール
オセアニア	ハワイ、グアム、ミクロネシア連邦など太平洋の島嶼国家・自治領、豪州、ニュージーランド、パプアニューギニア
南アジア	バングラデシュ、インド、ネパール、スリランカ、モルジブ、パキスタン、アフガニスタン
ロシア中央アジア	ロシア、バルト三国など旧ソ連領の諸国家
東欧	ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、旧ユーゴスラビアの諸国家、アルバニア
西欧	フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、アイスランド、ドイツ（西独ならびに統一ドイツ）、ベネルクス諸国、フランス、イギリス、スペイン、ポルトガル、イタリア、マルタ、バチカン、ギリシャなど
中近東	イラン、イラク、シリア、ヨルダン、レバノン、イスラエル、トルコ、キプロス、アラビア半島の諸国家、エジプト
アフリカ	エジプトをのぞくアフリカ大陸の諸国家・自治領
北米	米国、カナダ
中南米	メキシコ以南の諸国家、カリブ海島嶼部の諸国家・自治領

て、“国家”という範疇を設定している⁹⁾。たとえばハワイや香港、グアム、あるいは台湾である。

ガイドブックの中には、ドライブ、田舎町、自然、国立公園など特定のテーマを持つものが珍しくないが、本稿ではこうしたテーマは一切考慮せず、地域名だけに焦点を合わせた。これらの地域名は、NDL-OPACでいえば、“タイトル”もしくは“各巻タイトル”として表示されるものである。なお、上述のように、NDL-OPACにはいくつかの記録漏れ——国立国会図書館への納本漏れと思われる——があり、実物の閲覧やウェブサイト“アマゾン”での参照によって補うことができたものについては、表紙や目次の記載からも地域名をピックアップした。

もちろんガイドブックに記載される地域名と実際に本文中で扱われる地域とが一致しない場合もある。たとえば、香港を扱うガイドブックで、タイトル上に記載されなくともマカオや中国の深圳が紹介されているものは珍しくない。こうしたことは目次を見なくては分からない。同様のことは、シンガポールのガイドブックにおけるマレーシア（ジョホール・バル）、フランスのそれにおけるモナコ公国などにも言えよう。これらの場合でも、本稿では基本的に記載地名だけにしている。

また、現存しない国家は、その地域に現在存在している国家として数えている。たとえば「ソ連」は「ロシア」をはじめとするかつてのソ連領にある地域の国家として、「チェコスロバキア」は「チェコ」と「スロバキア」にそれぞれ分けてカウントしている。

ただし、「ヨーロッパ」や「東南アジア」、「カリブ海」などのように、国家レベルより大きなまとまりの地域名しか記載がなく、そこに含まれる国々が判断できない場合は、それぞれの地域名を国家レベルの一範疇にした。

最後に、本稿で用いるこうした地理分類があくまでも便宜的なものであることを断わっておきたい。たとえば、東ティモールやスペイン領カナリア諸島などは、記載地名としてOPACの情報に現れない。こうした、本稿で言う「大陸」の周辺に位置する地域が厳密にどの「大陸」に加わるのかについては考慮に入れていないということである。

Ⅲ 旅行ガイドブックとデスティネーションの考察

1) 旅行ガイドブックの概要

本章では、前章で説明した調査を元に分析を試みたい。まず、全体の概要についてである。表4は、1964年から2008年までの間に出版された旅行ガイドブック全6906点の中で、記載名として頻繁に名が挙がる地域を国家別に整理し、そのうち上位30地域を示したものである。後述するように、米国やハワイ、中国、フランス、イタリアをはじめとする上位の国々は90年代以降の国別

表4 1964年から2008年までの間に記載地となった国家と複数率

	国名	計	複数率
1	米国	703	4.4 %
2	ハワイ	507	4.9 %
3	中国	392	9.2 %
4	フランス	354	4.5 %
5	イタリア	331	7.3 %
6	韓国	316	2.5 %
7	イギリス	295	6.1 %
8	香港	278	52.5 %
9	タイ	254	14.6 %
10	オーストラリア	241	11.6 %
11	“ヨーロッパ”	230	—
12	台湾	213	4.2 %
13	グアム	209	60.8 %
14	ドイツ	197	13.7 %
15	シンガポール	184	29.3 %
16	インドネシア	184	9.8 %
17	カナダ	173	9.2 %
18	サイパン	164	74.4 %
19	スペイン	161	26.7 %
20	スイス	142	26.8 %
21	マレーシア	134	53.0 %
22	オーストリア	125	43.2 %
23	マカオ	117	96.6 %
24	ニュージーランド	109	22.0 %
25	ベトナム	96	30.2 %
26	オランダ	89	85.4 %
27	トルコ	88	22.7 %
28	ベルギー	87	81.6 %
29	インド	85	24.7 %
30	フィリピン	75	6.7 %

注)「複数率」は、複数の地域を扱うガイドブックの数が各合計の中で占めている割合を指す。

ランキングでも高い順位を占め、ガイドブックの世界の中で高い人気を誇るデスティネーションで有り続けている。「複数率」は、複数の地域を扱うガイドブックの数が各総数の中で占めている割合である。この率については後で再び取り上げる。

ガイドブックの出版全体の推移を年次ごとに見てみよう（表5・図1）。ガイドブックの出版点

数は増減を示しつつも、右肩上がりが増えてきたことが分かる。また、2000年代の初めがピークとなった以降は、それを越えることなく増減を繰り返してきている。こうした推移は、ガイドブックの出版点数だけではなく、各年に刊行されていたシリーズ件数についても言える。

上位を占める国々の顔ぶれや、持続的な増加から停滞傾向へという変化は、日本人の海外旅行者数の推移とも一致する。そうしてみると、ガイドブックの出版と海外旅行の間に、何らかの相関関係があると考えたくなる。このことについては後でさらに考察を加えることにして、ここでは、持続的な増加から停滞傾向へという変化が、旅行ガイドブックに限らない書籍全体における新刊点数の推移にも当てはまることを指摘しておきたい。書籍全体における新刊点数は、1999年と2008年に減少するほかは、一貫して増加し続け、しかも、近年停滞傾向にある。ガイドブックの出版点数の変化は、こうしたより大きな経済の動向も含めて考察されるべきであることを指摘しておきたい。

次に、シリーズの刊行年数を見てみよう(表6)。ここでいう「刊行年数」とは、表1の「調査対象の出版期間」を元に行っている。刊行年数は2年のものが多い。それに単年のものが続く。そして4年以下のものだけで112件に達し、全212件の半分を超えている。たしかに、ダイヤモンド・ビッグ社の「地球の歩き方」や実業之日本社の「ブルーガイド海外版」、「ブルーガイド情報版」のように、開始から20年以上の歴史を持つシリーズも存在するが、総体的に見て刊行年数は短い。

出版社の構成についてはどうであろうか。各出版社を系列ごとにまとめてみると、出版点数全体の半数近くをダイヤモンド・ビッグ社(ダイヤモンド社を含む)とJTB(日本交通公社、日本交通公社出版事業局を含む)のものが占めていることが分かる(表7)。その一方で、出版点数が割合にして1%に満たない出版社は全体の17.4%になる。それを1%台までとして計算すると、その割合は24.4%にまで達する。

前述のように、ダイヤモンド・ビッグ社やJTB、また実業之日本社や昭文社は、出版点数のみならず、出版継続年数が長いシリーズも持つ。ガイド

表5 旅行ガイドブック出版点数の推移

	旅行ガイド ブック 出版点数	書籍一般の 新刊点数 (単位：千点)	日本人海外 旅行者数 (単位：千人)
1964	8	13.9	128
1965	9	14.7	159
1966	6	15.8	212
1967	3	17.4	268
1968	17	17.6	344
1969	21	18.4	493
1970	22	19.2	663
1971	51	19.5	961
1972	31	20.7	1392
1973	23	20.1	2289
1974	12	19.9	2336
1975	15	22.4	2466
1976	57	24.1	2853
1977	39	25.8	3151
1978	16	27.1	3525
1979	60	27.1	4038
1980	56	27.7	3909
1981	66	29.2	4006
1982	88	31.5	4086
1983	67	33.6	4232
1984	50	35.8	4659
1985	66	35.9	4948
1986	81	35.7	5516
1987	114	36.3	6829
1988	116	37.0	8427
1989	124	38.0	9663
1990	181	38.6	10997
1991	195	39.9	10634
1992	239	42.2	11791
1993	190	45.7	11934
1994	165	48.8	13579
1995	236	61.3	15298
1996	241	63.0	16695
1997	289	65.4	16803
1998	314	65.5	15806
1999	302	65.0	16358
2000	330	67.5	17819
2001	368	69.0	16216
2002	375	72.0	16523
2003	406	72.6	13296
2004	357	74.5	16831
2005	352	76.5	17404
2006	366	77.7	17535
2007	397	77.4	17295
2008	387	76.3	15987

データ：「書籍一般の出版点数」は『出版指標年報』（全国出版協会出版科学研究所，2009）を、「日本人海外旅行者数」については『JTB Report』（ツーリズム・マーケティング研究所，2009）を元に作成している。

注）書籍一般の出版点数が1995年に増加しているのは、同年から新刊点数の収録範囲が改訂されたためである。

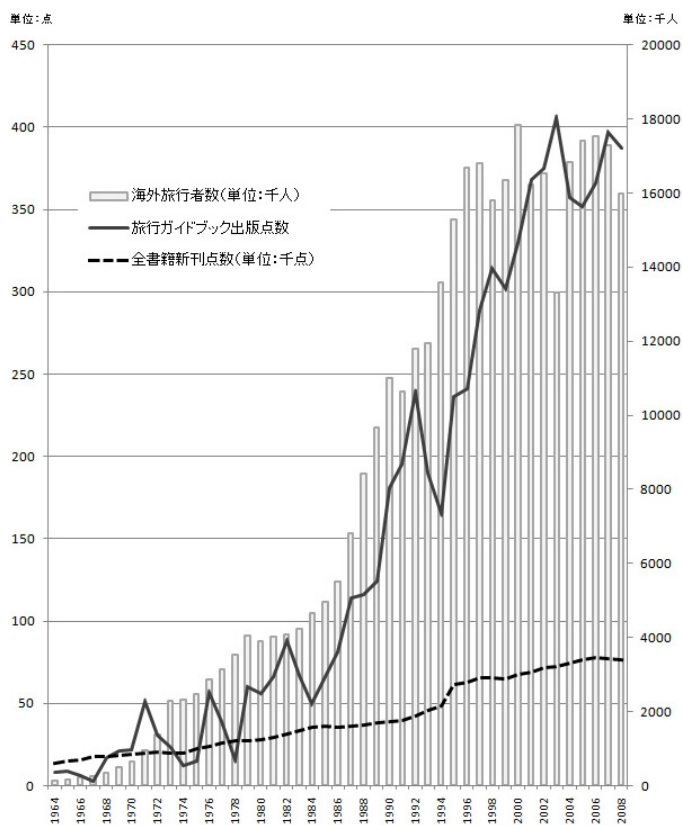


図1 旅行ガイドブック出版点数の推移

表6 シリーズの刊行年数

年数	シリーズ件数
21～	3
15～20	8
14	3
13	1
12	9
11	5
10	10
9	9
8	8
7	10
6	16
5	18
4	22
3	25
2	34
1	31

表7 出版社系列別に見た出版点数

系列名	出版点数	割合
ダイヤモンド・ビッグ社	1993	28.9 %
JTB	1154	16.7 %
昭文社	517	7.5 % b
実業之日本社	368	5.3 %
日地出版	305	4.4 %
近畿日本T	282	4.1 %
日経	256	3.7 %
成美堂出版	209	3.0 %
ワールドフォトプレス	162	2.3 %
朝日新聞社	103	1.5 %
三修社	96	1.4 %
山と溪谷社	93	1.3 %
ユーロプレス	86	1.2 %
JAL	82	1.2 %
その他	1200	17.4 %

注)「その他」は出版点数の割合が全体の1%未満の計72社を指す。

ブックを多数かつ継続的に出版してきているこれらの出版社が占める割合が果して高いのか低いのかという判断は、容易に下すことはできない。しかしながら、大手の“ガイドブックメジャー”が存在する一方で、それと同時に、その他多くの出版社によって数年で終わるガイドブックシリーズが多数出版されるというイメージは、ガイドブックの出版状況を把握するうえで重要であろう。

2) デスティネーションの構成要素

つづいて、どのような単位が旅行ガイドブックのデスティネーションになるのかについて考えてみたい。表3で示したように、本稿では大陸と国家からなる分類体系を用いて記載地の整理を試みている。ここで国家という枠組みを所与のものとして扱っていることは否定しようがない。それに対する批判もあろう。しかしながら、本稿がそうした立場を取るのには、現に旅行ガイドブックのデスティネーションが国家自体か国内のいずれかの地域（地方区分や都市など）であることが多いと分かったからである。多くのガイドブックにおいてデスティネーションは国家という枠の中で完結している。いいかえればそれは、ガイドブック上の地理が（「も」と言うべきか）国家に大きく規定されているということである。

本稿では、ガイドブックのデスティネーションの構成要素を明らかにするために、デスティネーションとして記載される地名を国家内レベルのものと国家間レベルのものに分けてみた。前者には、国家の名前自体が記載地になっているものや、都市や「……国の西海岸」など、国家の内部の地域がデスティネーションとして挙げられているものが含まれる。

一方後者の国家間レベルとは、記載地名が単一の国家に収まらないものである。もっとも分かりやすい例は、「ワールド・トラベル・ブック」シリーズの『タイ・ビルマの旅』（ワールドフォトプレス、1985）のように、その記載地名が複数の国家名から成っているものである。また、「ブルーガイド・ワールド」シリーズの『ロンドン・パリ・ローマ』（実業之日本社、1994）のように、いくつかの国家の有名都市で構成されているもの

も含まれる。さらには、「JTBのポケットガイド」シリーズの『南米』（日本公通公社出版事業局、1997）のように、たとえ記載地名が個々の国家の組み合わせではないとしても、事実上複数の国家を含んでいるものである場合、そうしたガイドブックも国家間レベルとして数えている。

なお、前章でも強調したように、ここでは個々のガイドブックが実際に扱う内容ではなく、基本的にあくまでも記載された地域にしたがっていることを再度強調しておきたい。

また、ハワイやグアム、サイパン、香港、マカオなどは、表3で示したように、単独で数えるのが妥当な地域として、ここでは便宜的に国家として扱っている。したがって、香港とマカオを同時に取り上げるガイドブックは、国家間レベルのものに含まれることになる。

このような分類を行い、その推移を示したのが、図2である。この図からは、1970年代までは両者に大差が見られないものの、1980年代とくにその後半から国家内レベルのものが急増していったことが分かる。2008年には、国家内レベルのものが334点に対して国家間レベルのものが53点というように、両者の間にはほぼ6倍の差が生まれるに至っている。また、1964年から2008年までの累計でいえば、国家内レベルのものが5449点で78.9%、国家間レベルのものが1457点で21.1%という違いになる。このように、デスティネーションが国家内に収まるか、あるいは一つの国家を超えた広がりとなっているのかでは、前者が優っている。

こうした国家内レベルという範疇に含まれる記載地名は、さらに国家そのもの、国家と国内の組合せ、国内のいずれかの地域（都市など）、という三つの類型に分けることができる。第二の“国家と国内”という組み合わせは、たとえば「ワールドガイド」の『ウィーン・オーストリア。2002-2003』（JTB、2002）や、「ひとりで行ける世界の本」シリーズの『バリ島・インドネシア120パーセントガイド』（日地出版、1991）など、記載地名が、ある地域の名称とそれを含む国家自体の名称から構成されているものである。

以上三種類の構成を示したのが図3である。こ

ここからは、第一に上記のような“国家と国内”の組合せが常に少数であったこと、また、1980年代以降徐々に“国内”の数が増してきているということが分かる。この変化は、ガイドブックのデスティネーションが国家という単位から、徐々にそれより小さい地域に細分化していく過程と言い換えてもよからう。

こうした細分化からは、1990年代に入り「日本人の海外旅行が成熟段階へ移行した」（国際観光振興機構、2007：70）という指摘が思い出される。海外旅行経験者は増大し続け、かつ繰り返し海外旅行するリピーターの存在が珍しくないものになっていった¹⁰⁾。この展開に呼応する形で、旅行者の好みが徐々に細かくなっていったと解釈

できる。ガイドブックの記載地類型における細分化は、後述する多様化とともに、海外旅行の「成熟化」と相関しているところが大きいと思われる。

さらに、細分化傾向は、国家間レベルの記載の割合が減少傾向にあるということにも表れている。図4は、国家間レベルのガイドブックの出版点数と、全ガイドブックに対するその割合を示したものである。同出版点数については増加の波を見出すことが可能であるが、その割合は1964年の88%から、1985年の38%、2000年の18%、2008年の14%までというように、明らかに減少していることが分かる。

国家間レベルの記載の減少という変化をよく表しているのが、“ヨーロッパ”そのものが記載地

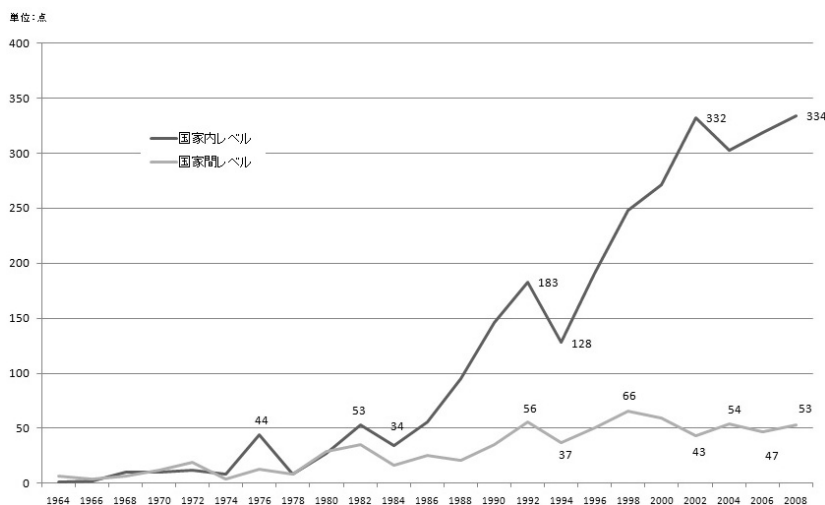


図2 記載地類型別に見た出版点数の推移

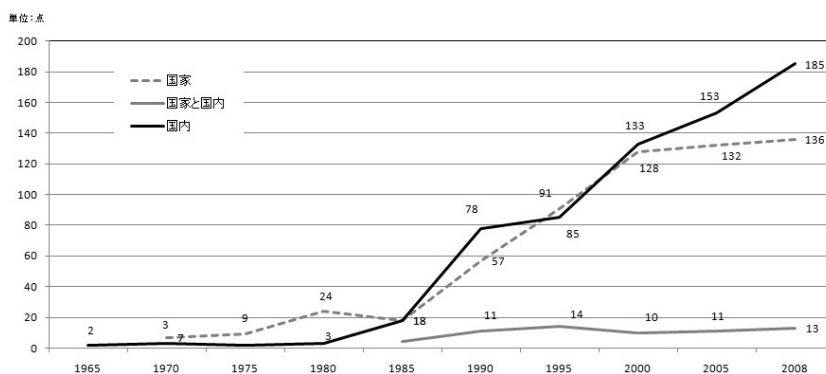


図3 記載地が国家内レベルのものの推移

になるガイドブックの減少傾向であろう。西ヨーロッパの国々を一冊でカバーするこのタイプのガイドブックは、当初は人気のあるガイドブックであった。1964年の1点から徐々に増加して、1992年には19点にまで達している。しかしその後は減少し続け、2008年はわずか2点を数えるのみにまでなっている。フランスやイタリアを筆頭に、西ヨーロッパ各国は今日でも人気度の高いデスティネーションであるが、もはや西ヨーロッパ全体を一冊で取り扱うガイドブックは稀少なものになっているのである¹¹⁾。

一方で複数の大陸を扱うガイドブックの点数については、1980年前後と1990年代後半以降という二つの期間における増加が顕著である¹²⁾。各変化には、それぞれ時代背景に応じた傾向が見受けられる。まず前者では、ヒッピーもしくはバックパッカー的な長期の個人旅行を志向するガイドブックの存在が目立つ。たとえば、「あむかす・旅のメモ」シリーズの『アフガン～イランバス旅行』（あむかす事務局、1980）や「地球の歩き方」シリーズの『アメリカ・カナダ・メキシコ 1982～1983年版』（ダイヤモンド・ビッグ社、1982）である。また、1980年前後という時代は海外渡航自由化以降から15年ほど経過していたとしても、いまだ日本人の海外旅行者数が400万人を前後していた時代である。「朝日旅の百科」シリー

ズの『フィリピン/ラオス/カンボジア/マカオ/ベトナム/香港』（朝日新聞社、1982）など、海外出張で日系企業の取引先を飛び回るといったケース以外はあまり実用性を感じさせないガイドブックもいくつか出版されている。

後者の1990年代後半以降の増加は、新たな旅行テーマの出現によるところが大きい。たとえば「世界遺産を旅する」（近畿日本ツーリスト）のような世界遺産専門シリーズの存在である。また、「クレアドゥエトラベラー」シリーズの『アイランド・リゾートの休日』（文藝春秋、2002）のように、地域横断的にリゾートを扱うものも増加している。ただし、「ワールドガイド街物語」の『ウィーン・プラハ・ブダペスト』（JTB、2001）のように、本稿で用いる分類（ウィーンが“西欧”でプラハとブダペストが“東欧”）によって「複数の大陸を扱う」という解釈になってしまうものも含まれていることも付け加えておきたい。

最後に、こうした国家間レベルに該当するガイドブックが、どの地域に多く含まれるのかについて述べたい。図5は表4の複数率（各地域を扱うガイドブック点数の中で、それ以外の地域も一緒に扱うものが占めている割合）をグラフ化したものである。また表8には、出版点数の割合が一定数（50点）を超える国家の中で複数率が高い上位20地域をまとめている。これらの図表からは、

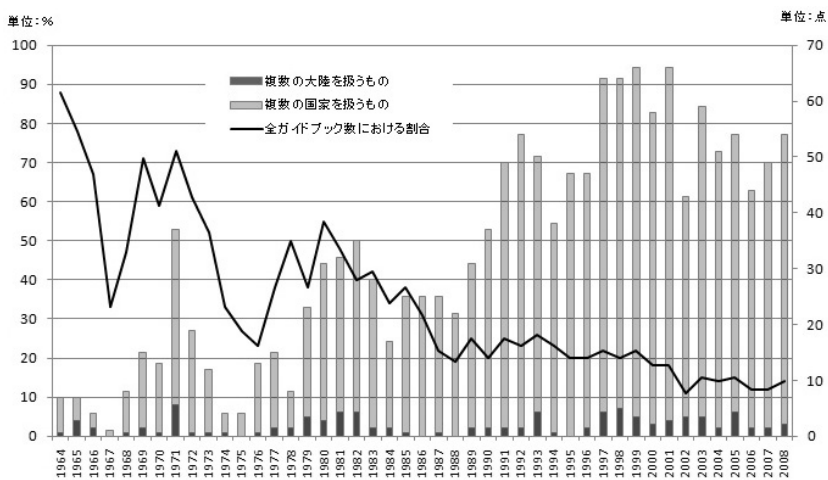


図4 国家間レベルのガイドブック出版点数の推移

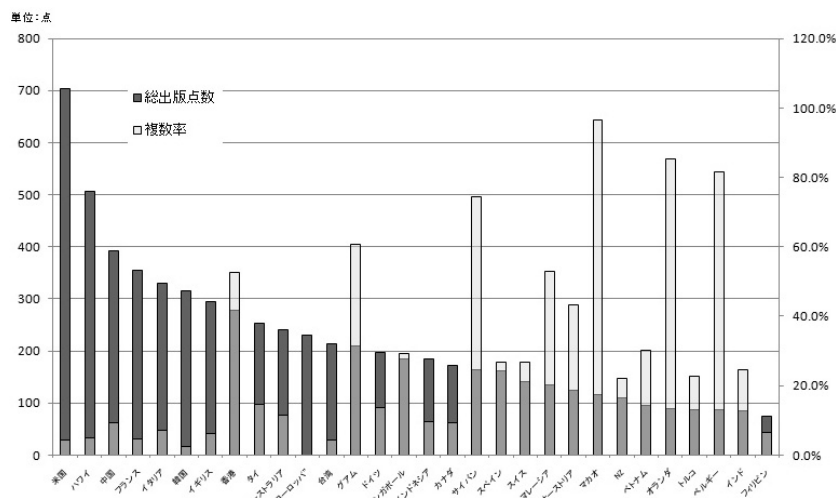


図5 出版点数が上位の国々における複数率の割合

複数率の違いについて、いくつかの傾向があることが分かる。第一が、周遊しやすい環境にある地域に複数率が高いという傾向である。たとえば、香港とマカオ、シンガポールとマレーシア、ベネルクス三国、ベトナムとカンボジア、オーストリアとハンガリーもしくはチェコに見られるように、隣接しているという地理的条件や、航路があったり鉄道網で密接に結ばれているといった交通条件が複数率の高さに影響していることが伺える。

“ヨーロッパ”を扱うガイドブックでは、フランス、イタリア、イギリス、ドイツ、スペイン、スイスなどの国々が含まれることが普通なことを考慮に入れると、これらの国々の複数率も本来ならば高い値を示すと考えるのが理にかなっている。しかしながらいずれにしても、これら西ヨーロッパの国々が、頻繁に企画されるバックツアーや各種鉄道パスを用いた長期旅行に見られるように、周遊しやすい環境にあることに変わりはない。

第二が、著名な観光地が隣接している地域に複数率が高いという傾向である。この傾向は、たとえば、香港に対するマカオの位置づけ、アンコールワットのあるカンボジアとベトナムの関係、さらに、パリやミラノなど人気のある観光地域が散在する“ヨーロッパ”という具合に、第一で挙げ

表8 出版点数の累計が50を超える国家の複数率

	国名	複数率
1	マカオ	96.6 %
2	チェコ	89.1 %
3	オランダ	85.4 %
4	ベルギー	81.6 %
5	サイパン	74.4 %
6	カンボジア	64.7 %
7	ハンガリー	61.5 %
8	ポルトガル	61.2 %
9	グアム	60.8 %
10	マレーシア	53.0 %
11	香港	52.5 %
12	メキシコ	51.6 %
13	オーストリア	43.2 %
14	エジプト	31.4 %
15	ベトナム	30.2 %
16	シンガポール	29.3 %
17	スイス	26.8 %
18	スペイン	26.7 %
19	インド	24.7 %
20	ギリシャ	23.5 %

た国々のいくつかにも当てはめることが可能である。

最後が、出版点数が少ない地域に複数率が高いという傾向である。この傾向は図5に明確に現れている。記載地として挙げられることが多いメジャーな地域は、他地域と一緒にではなく単独でガイドブック化されることが多い。逆に、比較的人気のない地域となると、他地域とともに扱われることになる。これは出版社にとって、人気のない一地域だけで一冊のガイドブックを刊行するメリットが少ないことに起因するものと考えられる。つまり、マイナーな地域のガイドブックは、他のメジャーな地域か、あるいは複数のマイナーな地域との“抱き合わせ”で出版されるのである。

3) 大陸別・国家別に見た推移

では、具体的にどのような地域が多く取り上げられてきたのであろうか。表9は、1965年から2008年まで頻繁に取り上げられた上位10地域を5年ごとに示したものである。1965年では、ガイドブックの数も計9点と少なく、記載地名に挙がる地域も15にとどまっている。さらにこの15地域の中で複数回取り上げられたところはなく、順位に分けるのは不可能である。その一方で、43年後の2008年に出版されたガイドブックは387点に達し、1964年の総数と同じ15地域で上位十位がすでに構成されている。

以下では、こうした大陸別・国家別という観点にもとづく考察から現時点で明らかになったいくつかの傾向を指摘しておきたい。第一がガイドブックに取り上げられる地域の多様化である。上述のように、1965年に記載された地名は15地域のみであり、ランク分けが不可能であった。その後2000年代には第1位の国家の点数は30点台にまで増加し、記載された地域の合計数は、2008年には89地域に達している。多様化という傾向は、先に述べた、デスティネーションが国家内の地域に細分化しつつあるという傾向とともに、旅行者の志向の変質と対応するものとして解釈することができよう。

第二の傾向が、人気のあるデスティネーションの固定化である。すでにふれたように、ガイドブ

ックで取り上げられる数において上位に位置する国々、すなわち米国、ハワイ、中国、韓国、フランス、イタリア、オーストラリア、グアム、さらにはイギリスや台湾といった国々の顔ぶれは、90年代以降お馴染みのものになってきている。また、これらの国々は、表4で示した累計における上位の国々とも重複している。90年代以降、出版点数の増加が80年代よりも著しいために、その蓄積が累計にそのまま反映されているのであろう。

第三が、地域間格差の拡大である。11大陸のうち西欧、東アジア、オセアニア、東南アジア、北米の5地域で全ガイドブック数の9割を超える。そして、これらの5大陸とその他の6大陸の差は、近年前者が横ばいもしくは若干の減少の傾向を示すまでは、広がり続ける一方であった(図6)。

似たような格差は、大陸内の国家間にも見出すことができる場合もある。たとえば西欧では、1980年代からフランス、イタリア、イギリスが優勢であったが、1990年代から徐々に他の第二集団の国々(オーストリア・スイス・スペイン・ドイツ)との距離が開き始め、2000年代に入ってから二分化が明瞭になってきている(図7)。

第四が、日本人海外旅行者数との共通点である。上述の、ガイドブックの出版点数で上位に位置するデスティネーションは、いずれも海外旅行者数のランキングにおいても上位に入る地域である(一例として表10で2007年の国別日本人海外旅行者数を示している)。このことからガイドブックのデスティネーションと旅行者のそれがある程度相関関係にあることが分かる。

また、海外旅行者数とガイドブックの出版点数が似たような推移をたどる例もある。たとえばタイやベトナム、シンガポールである(図8)。タイとベトナムを扱うガイドブックの出版点数と両地域への海外旅行者数は細かい点で一致はしないが、それぞれの国についてこれら二つの数値は、明らかに増加傾向を示している。

それと対照的なのが、シンガポールである。シンガポールを取り上げるガイドブック点数は、1968年に記載地として初登場して以来、数年ごとのサイクルを示しつつ増加してきた。1990年

表9 記載地として頻繁に取り上げられた国々

順位	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2008
1	4点 “アフリカ”, イギリス, イタリア, インド, エジプト, オランダ, スパイン, 中国など15地域	2点 イタリア	2点 台湾, 米国	7点 “ヨーロッパ”	9点 “ヨーロッパ”	27点 米国	28点 米国	38点 米国	34点 ハワイ	33点 中国
2	3点 米国, フランス, スイス	1点 “カリブ海”, “東南アジア”, ニュージーランド, オランダ, カナダ, スパインなど15地域	3点 イタリア, ブラジル, ドイツ, フィリピン, メキシコ, ロシア	6点 オランダ, カナダ, ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	5点 フランス	12点 ハワイ	17点 中国	29点 中国	33点 中国	31点 ハワイ
3	2点 “北米”, ポルトガル, スパイン, グアム, ギリシャ	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	2点 ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	5点 オランダ, カナダ, ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	5点 フランス	11点 フランス	15点 中国	19点 中国	30点 米国	28点 米国
4	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 オランダ, カナダ, ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 フランス	10点 イタリア	14点 中国	16点 中国	21点 中国	23点 中国
5	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 オランダ, カナダ, ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 フランス	10点 イタリア	14点 中国	16点 中国	21点 中国	23点 中国
6	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 オランダ, カナダ, ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 フランス	10点 イタリア	14点 中国	16点 中国	21点 中国	23点 中国
7	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 オランダ, カナダ, ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 フランス	10点 イタリア	14点 中国	16点 中国	21点 中国	23点 中国
8	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 オランダ, カナダ, ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 フランス	10点 イタリア	14点 中国	16点 中国	21点 中国	23点 中国
9	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 オランダ, カナダ, ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 フランス	10点 イタリア	14点 中国	16点 中国	21点 中国	23点 中国
10	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 “南米”, “東南アジア”, “中東”, “ヨーロッパ” など11地域	1点 ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 オランダ, カナダ, ギリシャ, スパイン, ドイツ, フィリピン, フランスなど13地域	4点 フランス	10点 イタリア	14点 中国	16点 中国	21点 中国	23点 中国

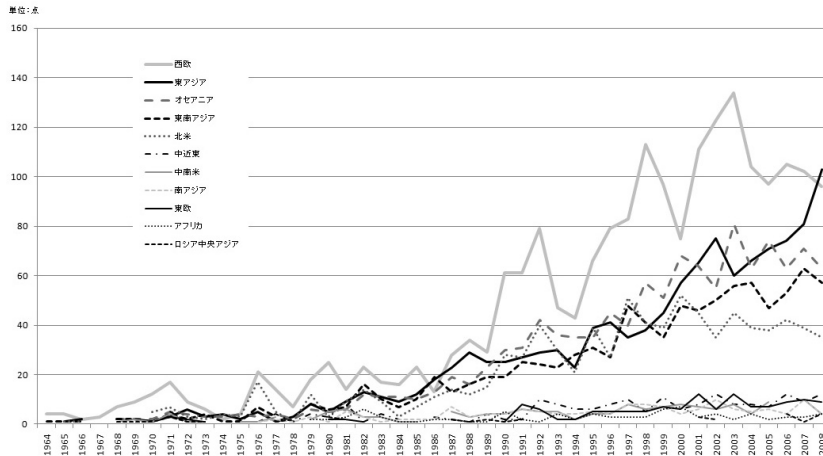


図6 大陸別に見たガイドブック出版点数の推移

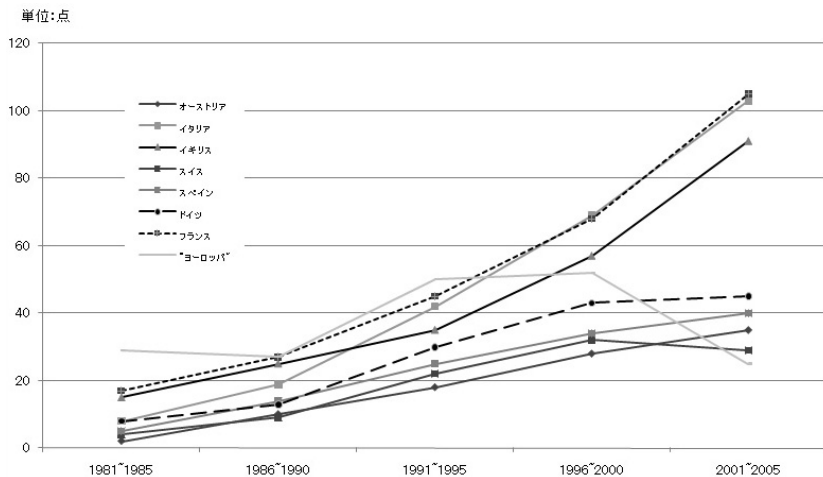


図7 西欧主要国に関するガイドブック出版点数の推移

代は、1992年に13件で第4位、1994年には9点で第3位となったことが示すように、上位の常連であった。けれども、98年に激減してからは10点を超えることはなく、上位十位に入ることすらない。この推移は、1996年をピークに減少し続けているシンガポールへの日本人海外旅行者数のそれと似ている（国際観光振興機構、2006：278）。

第五は、第四とは逆に日本人海外旅行者数の変化との違いに関するものである。海外旅行者数は湾岸戦争やSARS、同時多発テロなど、旅行地の治安を悪化させたり衛生面での危惧を増大させる

など、旅行意欲を削ぐ出来事の影響を受けやすい。けれどもガイドブックの出版点数の推移については、こうした特定の地域で突発的に生じる出来事の影響を見つけることは容易ではない。

1991年の湾岸戦争を例に取ってみよう。この年は、1980年の第二次オイルショック以来初めて日本人海外旅行者数が前年実績を下回った年として知られている。デスティネーション別によれば、オーストラリアや中国をのぞいて、ほとんどの国への旅行者数が減少したといわれている（ツーリズム・マーケティング研究所、1992：11）。けれども、ガイドブックの出版点数では、こうし

た変化は見られない。オーストラリアと中国を扱うガイドブックの出版点数は、1990年から1993年まで前者が9, 8, 10, 8, 後者が5, 7, 6, 11というように、関連性を見出すのが困難なものとなっている。

表10 日本人海外旅行者の主な訪問国
(2007, 単位: 千人)

1	中国	3977
2	米国	3531
3	イタリア	2882
4	韓国	2236
5	香港	1324
6	ハワイ	1296
7	タイ	1278
8	ドイツ	1194
9	台湾	1171
10	グアム	932
11	フランス	657
12	シンガポール	595
13	オーストラリア	573
14	スイス	555
15	ベトナム	411
16	フィリピン	395
17	マレーシア	368
18	スペイン	365
19	カナダ	330
20	イギリス	309

データ:『JTB Report』(ツーリズム・マーケティング研究所, 2008)を元に作成。

また、2003年のSARSにも同様のことが言える。SARSによって中国、香港、台湾、韓国など、東アジアを中心に旅行者数が大きく減少したと報告されているが(ツーリズム・マーケティング研究所, 2004: 9)、ガイドブックの出版点数に関して言うと、東アジア向けのものはすでに見たようにむしろ増加しているのである。この増加は、近年の“安・近・短”志向と関連付けることができると思われる。

1993年から翌94年にかけてガイドブック出版点数が大きく減少したことについて、そこに湾岸戦争の直接的な影響を見出すには無理があるとしても、ガイドブックを出版する準備段階も含めて考えると、海外旅行全般に対する手控え傾向が数年遅れで現れたと解釈することも可能である。ただし、この「手控え傾向」には、バブル経済の崩壊が引き起こした不況も影響していると考えるのが妥当であろう。

このように増減の因果関係を明らかにするには、旅行先で生じる出来事だけではなく、日本社会の社会経済状況、「韓流」などのブーム¹³⁾、旅行先国が実施するキャンペーンなどの関連も見る必要があろう。さらに、たとえば冷戦構造の破綻と経済改革が中国やベトナムへの旅行を可能にしたことが示すように、当該国家の政治経済状況や日本の友好関係の構築の如何から、航空路線の拡大・縮小、ビザ取得義務の有無までに至る、多様

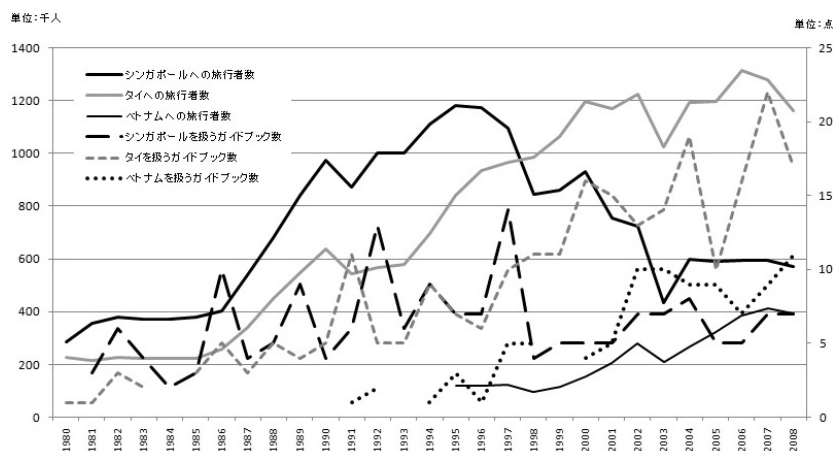


図8 シンガポール、タイ、ベトナムへの日本人海外旅行者数と各ガイドブック出版点数

な要素が関係しているものと思われる。

ガイドブック全体だけではなく各地域向けのものの推移についての詳しい分析は今後の課題としたいが、ここでは、戦争やテロ、疫病などの海外で突発的に生じる出来事にガイドブックの出版状況が大きく左右されることはないという点だけを強調しておきたい。

IV 結論

本稿は、海外旅行ガイドブックというメディアの中でどのような「海外」がどのように生産されてきたのかについて論じることを目的に、ガイドブックのデスティネーションの分析を進めてきた。

まず、旅行ガイドブックを紀行と対比させつつ、旅行ガイドブックが実際の情報を不特定多数の人々に対して包括的・汎用的に提供するレファレンスの書籍であること、また、シリーズ的なものが多く、有名な人物が著者になることが少ないことや、図書館に保存されることが少ないことを指摘した。

つづいて、1964年から2008年までに出版されたシリーズ物のガイドブックに焦点を当てたうえで、さらにいくつかの基準に照らして調査対象を212シリーズ、計6906点にまで限定した。次に、国立国会図書館の蔵書検索サイトを用いて、これらの調査対象の中でデスティネーションとして挙げられている記載地を記録していった。以上が調査の概要である。

その結果明らかになったことを、ガイドブック全出版点数の概要、デスティネーションの構成要素、そして具体的な地域としてのデスティネーションの推移という三つに分けて述べた。第一の全体の概要としては、ガイドブックの出版点数が1964年から持続的に増加してきたが、近年停滞傾向にあること、また、ガイドブック出版における大手がいくつか存在する一方で、多数の出版社によって数年で終了するシリーズが多数刊行されてきたという事実である。

第二に、デスティネーションの構成要素としては、国家という枠内が重要である。ガイドブック

には、一冊で複数の国家を同時に扱うものも珍しくないが、デスティネーションが一国内で収まるものの方が多数を占めている。さらに、一国といっても、ある国家の名称自体が記載地名となるガイドブックよりも、都市や一地方など国内の地域が記載されているものの割合が増加しつつある。このように、デスティネーションは細分化する傾向にある。

一方で、一冊のガイドブックで二つ以上の国が扱われている場合、その国々が周遊旅行をしやすい環境にあたり、著名な観光地とそうではない観光地から記載地名が構成されていることが多い。さらに、マイナーな地域が他の地域と「抱き合わせ」的にガイドブック化されることも少なくない。

第三の、具体的な地域としてのデスティネーションの推移については、以下の五点を指摘できる。まず、ガイドブックに記載されたデスティネーションの多様化と固定化という二つの変化である。また、デスティネーションとして選ばれる地域の間に格差が拡大している傾向も見られる。さらに、米国や中国、ハワイなど、デスティネーションとして頻繁に扱われるが、日本人海外旅行者数の多い人気のある国々でもあることが多い。最後に、戦争や疫病の流行が日本人海外旅行者数の減少の要因となることがあるが、旅行ガイドブック数の推移については、こうした突発的な事件からの影響は認めにくいということも分かった。

本稿は、戦後日本社会における「海外旅行」の全体像を捉える作業の中で基礎的な部分に位置付けられる研究として、旅行ガイドブック一般についての包括的な分析を試みた。こうした分析は、ガイドブックをテキストとしてだけではなく、メディアとしても分析するうえで、有益なものだといえよう。序論でも触れたように、こうした関心を持つ研究には、個々の旅行ガイドブックを比較研究する際の参照点となることや、アウトバウンド・ツーリズムの量や質を計るための新たなパースペクティブとなる可能性が期待できるのではなかろうか。

謝 辞

本稿執筆に当たり、立教大学観光学部豊田由貴夫教授、相模女子大学学芸学部鈴木涼太郎専任講師、立教大学観光学部大塚直樹プログラムコーディネーターからは、有益なコメントを多数いただいた。記して感謝したい。

さらに、昨年度立教大学観光学部を退職された白坂蕃先生（現・帝京大学経済学部教授）にも感謝の意を表したい。そもそも本稿は白坂先生退職記念となった前号への投稿を希望していたものである。けれども、私の怠惰さのために投稿を見送ることになってしまい、そのことがずっと気がかりであった。白坂先生の研究室で本稿のアイデアを話したときに元気づけられ、参考になる文献・資料を紹介してもらったことが忘れられない。そのときも美味しいコーヒーをいただいたのであるが、なぜか酔ったような感覚になったのは先生の熱意からであろうか。先生のように、自身の好奇心や関心に素直かつ忠実で居続けられるよう、私も頑張りたいと思う。

注

- 1) 本稿では「海外旅行」という用語の歴史的経緯については論じない。明治期の新聞紙上ですでに多用されているこの言葉の歴史についての考察は今後の課題としたい。
- 2) たとえば、バックパッカー向けのガイドブックであれば下川裕治による「アジア楽園マニュアル」や「好きになっちゃった」などのシリーズが、また“おしゃれ”な旅行についてであれば山下マヌーによる「お値打ち」シリーズがこうしたものに該当すると思われる。
- 3) これらのガイドブックの歴史については、(中川, 1979)が詳しい。
- 4) たとえば『出版事典』(布川, 1971)や『図書館情報学ハンドブック』(図書館情報学ハンドブック編集委員会, 1993), 『図書館情報学用語事典』(日本図書館情報学会用語辞典編集委員会, 2007)。
- 5) たとえば「ワールド・トラベル・ブック」シリーズの『ロンドン・イギリスの旅』では改訂第3版と同4版が納入されていない。また「世界を旅する人のイエローガイド」シリーズについても、OPACで表示されないものが多数存在する。
- 6) より正確には、「児童図書・簡易整理資料・教科書・専門資料室資料」→「簡易整理資料」→「家庭書・娯楽書」→「スポーツ・娯楽」という区分になる。「国立国

会図書館分類表」の分類体系については、国立国会図書館のウェブサイトで開催されている資料「児童図書・簡易整理資料・教科書・専門資料室資料」(<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/y.pdf>)を参照されたい。

- 7) 文中で言及する個々のガイドブックについては参考文献の一覧に記載していない。本文中で個々の名称を挙げる場合はシリーズ名も併記しているので、詳しくは表1を参照されたい。
- 8) 一まとめとなる書籍群だとしても、それが終期を予定して刊行される場合、シリーズではなく“セット”と呼ぶこともできる(図書館情報学ハンドブック編集委員会, 1993; 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会, 2007)。それにならえば『外国旅行案内』は、一まとめ完結のセットものとみなすことも可能である。「セット」のような形式で出版されるガイドブックはそう多くはないので、この点にも同書の特長さを垣間見ることができる。
- 9) したがって、本稿で用いる地理分類は、なんら筆者の政治的考え方を反映したものではないことを断っておきたい。
- 10) ツーリズム・マーケティング研究所が毎年行う調査によれば、リピーター数は2003年と2005年など前年を若干下回ることがあるものの、増加し続けている(ツーリズム・マーケティング研究所, 2005: 52)。
- 11) ただし、“ヨーロッパ”を扱うガイドブックの数が減少している一方で、1990年後半から“アジア”(東南アジアを中心とする地域で、日本はそこに含まれないという傾向を持つ)を主題とするガイドブックが増加していることを考慮に入れると、本稿で言う細分化は単なるデステイネーションが細かくなっていく過程である以上に、もっと大きな地理分類の再編成の過程と推測することもできよう。この問題については今後の課題としたい。
- 12) 1993年の増加は、新日本法規出版の「世界の旅と観光」シリーズが一度に3点刊行されたためである。
- 13) 本稿では出版点数から「海外旅行」の在り様を探ろうとしてきたのだが、こうしたブームによってガイドブックの出版点数に変化が現れない一方で、記載内容には大きな変化が生じるという可能性があることは注意すべきであろう。

文 献

(注7で記したように、個々のガイドブックについては、併記されたシリーズ名をもとに、以下の一覧ではなく、表1の「シリーズ一覧」を参照されたい。)

Bhattacharyya, D.P. (1997): "Mediating India: An analysis of a guidebook", *Annals of Tourism Research*, vol.24/2, pp. 371-389.

- ブーアスティン, D.J. (星野郁美・後藤和彦訳) (1964): 『幻影の時代—マスコミが製造する事実』東京創元社.
- 長谷政弘 (編) (1997): 『観光学辞典』同文館出版株式会社.
- 橋本俊哉 (2007): 「英国18世紀後半における自然地域を舞台とした観光の展開過程—ワイ川下流地域を題材として」『立教大学観光学部紀要』第9号, 27-36.
- 加賀美雅弘 2008 「中央ヨーロッパにおける都市景観の意義: プダペストの旅行ガイドブックを用いた考察」, 『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ』第59巻, pp. 39-58.
- 加賀美雅弘 2009 「旅行ガイドブックに描かれたベルリンの景観: ペデカー『ドイツ帝国』の記述からの考察」, 『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅱ』第60巻, pp. 59-72.
- 北川宗忠 (編) (2008): 『観光・旅行用語辞典』ミネルヴァ書房.
- 国際観光振興機構 (編) (2006): 『JNTO 訪日外客訪問地調査: 外国人旅行者の国内訪問地データ』国際観光サービスセンター.
- 国際観光振興機構 (編) (2007): 『JNTO 訪日外国人旅行の経済波及効果調査報告書: VJC 目標 (2010年訪日外国人旅行者1,000万人) 達成時の経済波及効果』国際観光サービスセンター.
- 前川健一 (2003): 『異国憧憬—戦後海外旅行外史』JTB.
- 前田勇 (編) (1998): 『現代観光学キーワード事典』学文社.
- 中川浩一 (1979): 『旅の文化誌—ガイドブックと時刻表と旅行者たち』伝統と現代社.
- NDL 入門編集委員会 (1998): 『国立国会図書館入門』三一書房.
- 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 (編) (2007): 『図書館情報学用語辞典』丸善.
- 布川角左衛門 (編) (1971): 『出版事典』出版ニュース社.
- 旅行作家の会 (編) (2006): 『スローツーリズム展望』現代旅行研究所.
- 図書館情報学ハンドブック編集委員会 (編) (1993): 『図書館情報学ハンドブック』丸善.
- ツーリズム・マーケティング研究所 (編) (1992): 『JTB report: all about Japanese overseas travelers = 日本人海外旅行のすべて 1992』日本交通公社.
- ツーリズム・マーケティング研究所 (編) (2004): 『JTB report: all about Japanese overseas travelers = 日本人海外旅行のすべて 2004』日本交通公社.
- ツーリズム・マーケティング研究所 (編) (2005): 『JTB report: all about Japanese overseas travelers = 日本人海外旅行のすべて 2005』日本交通公社.
- ツーリズム・マーケティング研究所 (編) (2008): 『JTB report: all about Japanese overseas travelers = 日本人海外旅行のすべて 2008』日本交通公社.
- ツーリズム・マーケティング研究所 (編) (2009): 『JTB report: all about Japanese overseas travelers = 日本人海外旅行のすべて 2009』日本交通公社.
- アーリ, J. (加太宏邦訳) (1995): 『観光のまなざし—現代社会のけるレジャーと旅行』法政大学出版局.
- 矢口祐人 (2002): 『ハワイの歴史と文化—悲劇と誇りのモザイクの中で』中央公論社.
- 山口さやか・山口誠 (2009): 『「地球の歩き方」の歩き方』新潮社.
- 山口誠 (2007): 『グアムと日本人—戦争を埋立てた楽園』岩波書店.
- 山中速人 (1992): 『イメージの〈楽園〉—観光ハワイの文化史』筑摩書房.
- 山中速人 (1993): 『ハワイ』岩波書店.
- 山中速人 (1996): 『観光地イメージの形成』, 石森秀三編 『観光の二〇世紀』ドメス出版.